

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成25年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

プログラム名称	フロンティア宇宙開拓リーダー養成プログラム	申請大学名	名古屋大学
申請大学長名	濱口 道成		
プログラム責任者	國枝 秀世		
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> プログラムの運営体制は、採択後短期間のうちに準備が進み、整いつつある。また、当初の実施計画についても準備、着手され始めている。現在までに以下のような進捗が見られる。 総長の下に、プログラム責任者、プログラムコーディネーターを置き、さらに企画委員会、ChubuSat 推進室が置かれ、予定の教育体制を形成している。 宇宙理工学に関する Minima-A、Minima-B の講義セットを準備し、専攻によって選択、必修科目として提供している。3～6ヶ月のインターンシップを必修として、俯瞰・実践能力を養おうとしている。3年次には、ChubuSat 実践プログラムを配備し、既存の衛星プロジェクトを活用して宇宙開発・利用のチームプロジェクトに参加させ、企画立案力、問題解決力、マネジメント力を養おうとしている。 特任教員及び、メンターとしての研究員を採用して、教育体制の強化を図っている。 平成25年度入学生の中から10名を、過年度学生の中から66名を、既に本プログラム履修者として受け入れている。受け入れ学生には経済的支援を提供し、特に優れた者に対して重点配分している。 <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> 個別の努力は認められるが、理工連携の複合横断プログラムとしてグローバルリーダーを養成するという観点からは、未だ課題が多く、大学としてのリーダーシップと本格的な取組が強く望まれる。 ディシプリンの壁を超えた幅広い宇宙科学の先端を拓き、新しい宇宙産業を牽引する国際的なリーダーを育てることが目的にあると理解できる。その両方の目的に沿ったプログラムの構築という観点からは、現状では物足りない。 教員、学生に、学生の将来のキャリアパスの具体的なイメージが共有されていない。学生の多くはアカデミアの研究職を漠然と志向しており、将来グローバルなリーダーとして活躍するという自覚と責任感を涵養するプログラムへ改善が必要である。 多数の学生が履修していることは好ましいが、本プログラムへ参加するための要件やサーティフィケート発行の要件を明確化し、プログラムの目的に照らして履修者の達成度を厳密に確認する必要がある。 学生の選抜は、主として、理学研究科素粒子宇宙物理学専攻と工学研究科航空宇宙工学専攻の2専攻、そしてその他の専攻に所属するプログラム担当者の指導学生からのみとしているが、全学に門戸を広げ、より広い分野から学生を受け入れる体制を大学として設計し、次世代グローバルリーダーを育成する強力なブランドとして構築することを期待したい。 M1のプログラム履修学生の内訳では工学系が極めて少ない。また、D1、D2コースは、本プログラム特有のリーダー養成に十分な時間をかけているとは見受けられないので早急な改善が必要である。 			

- 学生は ChubuSat 実践プログラムが唯一の魅力と感じており、一定の成功を収めてはいるが、国際的に一流のリーダーを育てる観点からは十分でない。ChubuSat 実践プログラムの内容をより高い水準へ引き上げるなど、再検討が必要である。講義体系としても、例えば、宇宙基礎から宇宙開発や利用に亘る体系的カリキュラムの提供が考えられる。
- 語学教育は、現行では留学生との自発的な交流と海外滞在に主として依存しているが、十分とは言えない。英語講義・演習を始め、学生が英語環境に日常多くの時間さらされる国際的な教育研究環境を早急に構築する必要がある。
- 次世代宇宙産業を開拓するグローバルリーダーを育成するためには、広い分野の融合連携が欠かせない。組織は理学系教員が多く、プログラム責任者もプログラムコーディネーターも理学系では、プログラムを推進していくことは難しいといえる。工学系の他の教員の参加を実現し、分野横断の教員・学生の融合連携のメリットを生かして、プログラムの目標を達成することを狙うべきである。
- プログラム担当者に外国人を入れるなど、国際化を進める大胆かつ真剣な取組を行うべきである。この点に関して、全学を上げて推進する体制を構築することを期待したい。さらに、多様な教育研究環境を実現するために、女性教員を増やすための一層の工夫・努力を期待したい。